

吉田孝次郎さん (高8 昭和31年卒) 11組 祇園祭山鉾連合会 元理事長 京都生活工芸館無名舎主 祇園祭を本来の姿に



昨年まで祇園祭山鉾連合会理事長を努めておられた吉田さん宅を訪問し、祇園祭を本来の形にされた経緯と歩んでこられた人生についてお話をお伺いしました。吉田さんは、生地問屋を営まれていたお家の6代目として、昭和12年に誕生されました。お住まいは六角新町を南へ行ったあたりで祇園祭には北観音山という曳山が立ちます。戦争中は中止されていた祇園祭は昭和22年に長刀鉾と月鉾のみが復活します。巡行は長刀鉾のみで寺町までの往復だけという寂しいものでした。昭和23年にはこの北観音山と船鉾が復活します。北観音山の先頭を歩くお父様が凜々しく、それはかっこうよく輝いて見えたそうです。戦争に負け落ち込んでいた京都の旦那衆もこのように祭りの復活と共に元気になっていきます。その年、小学校5年生だった吉田さんは、北観音山の囃子方となります。祇園祭との本格的な関わりがここから始まります。また祇園祭も次第に各々の山鉾が復活し現在のような形に近づいたのは昭和27年のことでした。



北観音山

堀川高校を卒業し武蔵野美大へ

吉田さんは地元の高校ということで堀川高校へと進学します。共学になってまだ日も浅い堀川高校が甲子園出場を果たした上、3回戦まで勝ち進んだのを見たそうです。共学になって校歌も校旗もまだなかったため、慌てて応援旗を作り、また生徒が作った生徒会歌を唱ったそうです。吉田さんは今でもこの生徒会歌「緑なす森」を非常に気に入っておられます。高校を出て東京の武蔵野美大へ進学します。その後造形学部助手として、その学校で教えることとなります。その結果東京での生活が実に18年も続きます。無論祇園祭の頃や学校が休みに入るときには京都に帰られ祇園祭との関わりは続いていました。

京都に戻り祇園祭を元の姿に



現在の吉田家(京都生活工芸館)

東京での生活を終え京都に戻ってきた吉田さんは、京都が近代化という名の下に大事なものを多く失っていることに気が付きます。実家でさえ玄関にガレージを作り京町家の風情など残っていませんでした。町全体がそんな雰囲気だったので。吉田さんは実家を元の町屋の状態に戻し、現在の京町家のブームの先駆けとなる町屋の新しい利用方法も模索し始めます。今でこそ、京町家を使ったレストランやギャラリーは珍しいものではありませんが、これがその先駆けだったのです。祇園祭そのものも大きく変貌を遂げていました。元々前祭りとは後祭りに分かれていたのですが、昭和41年に一つの祭りにまとめられてしまい、大きな観光イベントとして位置づけられるようになりました。祇園祭が盛大となり復活したことはよいのですが、夜店が並び騒々しくなっていく状態に強い違和感を覚えていたそうです。すでに祇園祭山鉾連合会の理事を永年勤められていた

何とか復元に成功します。こうして遂に2014年、48年ぶりに祇園祭は本来の形に戻ります。前祭りは今までのように賑やかな祭。後祭りは落ち着いた昔の姿に近いお祭りとなりました。

祇園祭は別名「屏風祭」とも言われ家の表の格子を外して屏風や調度品などを飾り、祭り見物に来た人々にも、通りから鑑賞してもらえるようにしています。後祭では屋台も少なくゆっくりと鑑賞できるようになり前祭とは違う楽しみ方が出来るようになりました。



理事長として重い責任を負うだけでも大変なことです。去年、大雨と暴風が吹く中巡行するかどうかの判断で「天候で祇園祭が中止になったことはない。風はともかく雨で鉾が止まることはない。」と判断され暴風警報が出ないのを見て巡行決行の判断をされたのは記憶に新しいところです。このような重責の中、大きな変革を行うことはどれほど大変なことだったのでしょうか。このような改革には京都を離れて外から京都を見るアウトサイダーの目を持ったことも大きかったと言えます。インサイダーでありながら客観的に京都を、祇園祭を外から見る力があつたからこそ可能だったのではないかと思います。

現在も京都の文化を盛り上げるために奮闘中

平成元年に京都生活工芸館無名舎を開設され、平成17年から武蔵野美術大学参与を務められ京都だけではなく東京でも海外にも活動の範囲を広げています。お伺いしたお家には、お隣韓国や中国、遠くはインド中東から町衆達の集めた様々なタピストリーや陶器などが展示されており、さながら博物館の一角にいるようでした。しかも博物館のようにガラス越しに見るのではなく、触って見る事が出来るのです。伺った当日は、これらの収集品を海外で展示するための準備もされていました。理事長は後任に譲られましたが、まだまだ祇園祭を含む京都の町衆の文化を盛り立て広げて行くべく現在も力強く働かれています。

今年4月14日から20日まで京都芸術センターで、吉田さん主幸による「都に届いた異国の風 PART2」という展示会が行われます。そこで、これらの收藏品を見ることが出来ます。是非、おこしください。



企画・取材・記録 村山（山本）敬子・大八木一寿
起稿・編集・撮影 河岸勝弘
2016年3月取材